

きわめて大きな村があるとともに、他方では小さな村があるという具合に、きわだった対照を示している。こうした村域の小さな村の多くは、大きな村の分村から次第に本村（新村）に成長し、あるいは當該の村からまたは鄰村から土地を得て、新村として形成されたか、あるいは新村を生み出すことによってみずからその村域を小さくした村であったと推定される。したがって、當時この地域の村は、もともとはその村域がかなり大きく、それもかなりルースに形成されたものと考えられる。

こうした大きな村のなかには、分村を生み出しつつも、次第に都城（カスバー）に成長してゆくものもあった。都城は、一般に郡都として當該の郡の行政の中心地であったが、同時にその地域における商工業の中心としての機能をも果たしていた。とりわけ、一八世紀後半以降に形成されてくる都城は、同時期に *gani*, *mandi* の語尾をもつ市場町や市場村の形成と同様に、まずもって商工業の中心地、市場町として出現するが、同時にこれまでの郡都にかわってしばしば行政上の機能をも果たすことになった。ここでは、そうした都城としてジャーラー・パターン (*Jhalapatan*) という都城を中心に、都城の形成過程を追究することにしたい。

一九二〇年代の「國粹」

——儒教再評價の視點——

森 紀子

一九二〇年代の中國思想界は、マルクス主義浸透の一方で、國學の希求が顕在化された時期でもある。二年四月、周作人は『國粹主義勃興の局面』として、『學衡』派と『朱謙之の古學』を指揮した。朱謙之は青年毛澤東に影響を与えたアナキストとして有名であるが、同年三月から『民鐸』誌上に獨特の「唯情哲學」を開陳する。天地萬物の本體は「情」であり、渾然天地萬物一體の「眞情之流」の哲學こそが孔家の眞面目であるとするこの唯情哲學は、彼がこれまで主張してきた虛無哲學を百八十度反轉させたものであり、その確立に多大の影響を与えたのが梁漱溟の『東西文化及其哲學』である。そもそも、新文化運動における傳統儒教への攻撃は、儒教の本質を「吃人禮教」と喝破してのものであった。非人間的な禮理に對する反撥は、當然、人性における情の解放を主張するのであり、その限りではこの情感哲學は、新文化運動の潮流にそうものといえる。ただ、梁、朱兩者は一轉、この情を儒教の本質とみなした。周易の「生々」をふまえた生命贊美の人生觀は、萬物一體の仁、現成良知を主張した明代の泰州學派との親近性を示しつつ、ベルグソンの生命哲學を換骨奪胎したものである。

新文化運動のスタンスからは、國粹主義とみなされた朱謙之と學衡派（新人文主義）は、歐米における近代への反省、反科學萬能主義の思潮を、バックに儒教を再認識したのである。